

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520148

研究課題名(和文) 笑芸作品の構造分析と科学的創造性

研究課題名(英文) Analysis of a comedy structure and scientific creativity

研究代表者

井山 弘幸 (Iyama, Hiroyuki)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70168532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：落語や漫才などの笑芸はどのようにして「笑い」を生み出すのか、という問題を、映像資料と実演(ライブ)をテキストとして分析し、芸人が用いる笑いの技法を12のカテゴリーに分類した。さらにテキスト生成時に働いている思考に注目し、科学的発見とくにセレンディピティーと呼ばれる創造的発見の現場での科学者の思考過程と比較対照することにより、笑いを生み出すセンスと科学的創造性とが、同形のものであることを究明した。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of video texts of comical performances, the mechanism by which performers may produce laughter proved to be of 12 categories of humor. This mechanism turned out to be akin to scientific creativity.

研究分野：科学技術史

キーワード：笑芸 テキスト分析 科学的創造性 落語 漫才

1. 研究開始当初の背景。

公開された笑芸の作品構造について、著書『お笑い進化論』(2005年)と『笑いの方程式』(2007年)で提案した12の技法を確証するために、最新の笑芸テキストのデータベースを作成しつつあった。12の技法を以下に示す。1) 反復。繰り返すこと。もっとも古典的な笑いの原理である。2) ずれさがり。へりくだることではない。これは *crasia* の一つであり、何かが過剰であるとき、その価値を貶めることでバランスをとろうとする機能である。3) キプロクオ。一つの事態をまったく異なる視点から再解釈する可能性を生み出す。あるいは取り違え図式のこと。アンジャッシュのコントはその殆どがこの技法による。4) 譬え・例え。何にたとえるかがこの喜劇的要素の核心にある。より価値の低い、とるにたらないものにたとえれば、叱責を買う危険もある。かといって持ち上げすぎると厭味や皮肉と受け取られかねない。5) 類音変換。言葉を音と見て類似性のある別の言葉に変換してゆく。駄洒落もその一種だが、あまりにももとの言葉とそっくりだと失笑が待ち構えている。6) ナンセンス。意味不明の言葉ではない。意味はわからないが、何か深いことがあるのではないか、と思わせて、実際は何もないという状況。谷啓の「ガチョーン」も意味不明のこの技法に属する。7) 現実批評。いわゆる「あるある」だ。これは距離の芸術ともいべき技法。基本形は「～って、あるよねえ？」なのだが。これは統計的合理性を裏づけにもつ必要はない。日常的な反復を第三者の目で再構成する。8) 針小棒大。針ほどの小さいものを、棒のように大きく言う。オーバーな奴はどこにでもいるが、ここはリアリティーを逸脱しても規模の拡大を優先する。落語の「嘘つき弥二郎」がその極端な例。北海道では「おはよう」も凍るほどの寒さ、という誇大なつくり話。9) シュール。どこにも類似性のない、唐突な異様な世界の提示。これはむしろわれわれの日常性の前提をつきくずすことで生み出される笑いの方法。前提つまり当たり前だと思っていることを、決して正しいものとは考えない態度からシュールは生まれる。初期のダウタウンやまだネタをやっていた頃のよゐこが得意とした。10) 模倣。これは笑芸では独立したジャンルだけれど、健全なる精神として考えるには、単純に芸能人や有名人のモノマネだけではすまされない。これはマニエラつまりお手本があって成立する世界であって、そっくりそのまま複写する精神である。11) 論理的逸脱。代表的なものが矛盾で。言明のなかで矛盾する命題が提示される。「粗

忽長屋」の「当人に死体を引き取らせませす」など。同じ落語のなかの「生まれたときは別々でも、死ぬときは別々の友達」は論理的には自明のことであり、これもまた論理的逸脱に含まれる。12) 宙づり。言おうとして言わない、とか。ルールが分からないもの前でプレイをするなどの技法。ヒッチコックのマグガフィンのように得体のしれない「もの」や「ルール」が存在するだけの如実な不一致感で笑いをとる。

以上の技法あるいは笑いのイデオムを実際の笑芸に適用して分析する準備が整った時点で本研究は始まった。

2. 研究の目的。

笑芸のイデオムを構成する12の技法がテキスト生成の際に用いられる創造の過程と科学的発見の創造性とのあいだの近似性・相関性を見いだすこと。ユーモアの発見と科学的発見との関連性。前半の過程の研究は、上述の12のイデオムの重ね合わせとして捉えることで、笑芸作品を記号化する作業を企画した。例えば「キプロクオ」(*quipro quo*)と「論理的逸脱」(*logical deviation*)とが重ね合わさった場合は、*Qq*・*Ld* というように、「シュール」(*Surrealism*)と「模倣」(*Mimesis*)との組み合わせは、*S*・*M*という風に。これらのイデオムの論理積を用いて作品の分類を行ない。それぞれの構造のなかで命題群がどのような論理的・情緒的關係をもつかが焦点となる。例えば落語の「蒟蒻問答」の旅の僧侶と六兵衛との対話は、アンジャッシュのコント「息子と部下」と同様の型をもつ。この場合はキプロクオを生じさせている共通の環(*common link*)を探す創作行為も同様になる。これまでこの分析の対象外だった落語の「枕」と「ネタ」との關係。とくにオチが観客の腑に落ちるための誘導的な枕話の創造は、論理構造がアブダクションと類似しているのではないか、という予想を立てて演芸場のライブ・パフォーマンスから手がかりを得ることを目的とした。

後半では、5. の [図書] 01 の『パラドックスの科学論』第六章で主題的に論じたセレンディピティーの事例研究を手始めに、創造的発見の過程で発見者の推論構造はどのように変容していったかを調べることにより、ユーモアの想像過程と科学的発見の創造過程とがきわめて類似したものであることを明らかにしようと考えた。実際のところ、アーサー・ケストラーは半世紀も前に、科学者の発見を導く思考過程と、ユーモアによって笑いを生み出す思考過程とが酷似していることを指摘していた。この

種の科学とユーモアにおける類似性の発見を、ケストラーがおこなった、ゲテンベルクの印刷術などの事例分析と重ならないように新しい素材を探して実行することが後半の目的である。

3. 研究の方法。

前半では落語・コント・漫才、後半ではバラエティー番組における雑壇芸人たちの会話の分析を通じて、ユーモアを創造する過程を12の技法の論理積として表出することを実行した。とりわけ本題に入る前のマクラの構造に力点を置いた。枕ばなしは人間国宝・柳家小三治のようにCDとして単独で録音販売されている希少なケースはあるものの、一般的にはライブすなわち寄席やホールの現場におもむき、耳で聞いて記録をとるしかない。必然的に取り上げることでできる事例は限られたものとなる。本ネタから逆算して思い至るので、これはパースがシャーロック・ホームズの推理を題材にして提案したアブダクションと類似している。ここでは赤外線の見え方や宇宙背景3K輻射などの科学史の事例と比較照合して、その推論構造の近遠性を明確にする。「枕」に対応する漫才の要素を「ツカミ」と言う。千編一律のごとく繰り返される「ツカミ」の存在理由の探求をするには、やはり「ツカミ」部分の命題群と「本ネタ」部分の命題群とのあいだの論理的関係を調べねばならない。漫才はDVD化されたものでも、ツカミ部分がカットされていないので、落語と異なりライブに限定する必要がない。主としてM1グランプリのネタにおける「ツカミ」と後半の「ボケ」「ツッコミ」との論理的関係が分析の対象となる。

後半では、落語や漫才などの特徴的な構造をもたない談話形式のテレビ番組を素材にして、登場した芸人たちのやりとり、役割、会話の配分などに注目して分類整理する。『アメトーク』DVD全36巻をテキストとして、即興的に笑いを創り出す談話の極意を、やはり12の技法の論理積として整理し直すことで明らかにしてゆく。更に、落語・漫才・コント・フリートークの笑いをとる会話構造の記号化が一通りすんだら、今度はセレンディピティー物語や発見発明譚のなかに語られる「発見の論理」とのあいだの関連・類縁性の探求をおこなう。どちらも記号化が完遂していれば、容易に比較考察することができる。

4. 研究成果。

笑芸テキストの構造分析については、日本笑い学会・新潟支部および総会においてケーススタディーを発表した。科学創

造性との関連については、著書『パラドックスの科学論』(2013年)の第六章、セレンディピティーを中心に扱った章で主題的に論じた。全体を通じて、笑いを生み出す知的創造の過程と、科学的発見を導くイノベーションの過程とが、きわめて類似していることが判明した。明らかになった点を中心に、何点かに絞って以下に示す。

1) 落語の「寿限無」には多くの変型がある。もの知りの和尚が新生児の名付け親となり、仏典の『無量寿経』から「寿限無」から始まる長い名前をつけたおかげで生活上色々支障が出てくるという話が原型。柳家喬太郎は一通り原型を語った後で、さらに「寿限無・・・」に子供が生まれ「寿限無・・・ジュニア」になったと締めくくった。三遊亭円丈は名付け親が分子生物学の大家で「酸素、酸素、クローンのすり切れ・・・」で始まる科学的に有り難いものの列挙から名前を創造。さらに(2014年NHK演芸新人賞受賞の)鈴々舎まるは、「ハンゲル寿限無」のタイトルで、脱北者の女房のためにハンゲルで名前をつけて貰うという国際的な筋立てとなった。三笑亭夢之助の「寿限たら」のように「寿限無」に「たらちね」を合体させた変型版もある。いずれも笑いの技法1)の「反復」(repetition)と、8)の「針小棒大」(Tremendous Trifles)からなる、Tr・R型のテキストであり、「枕」では大抵は「名づけ」の問題、名辞と実体の問題がふられる。名は体を表すのか、それとも単なる記号なのか。喬太郎は噺家の前座・二つ目の名前を枕に振って、とかく人につけられた名ほど厄介なものはない、と寿限無テキストの予表となる反復の話題を振っていた。

科学的創造においてもTr・R構造をもつ推論は重要な場面で何度も立ち現れた。フランスのアモントンあるいはロシアのロモノソフが18世紀に絶対零度を発見した過程は、物理科学や計量科学などでは外挿法(extrapolation)と呼ぶ手法を用いたものであり、寿限無と全く同一のTr・R構造をもつことが判明した。

2) KKPの戯曲『sweet 7』の挿話的なジャンケン。これは登場人物鮫島だけがルールを知らなかったために起きる喜劇的状况。技法12)の宙づり(Suspension)をテキスト化したもので、S・R構造をもつ。これは、はんにゃのコント「ズグダンズンゲンゲーム」(相手がルールを知

らないゲームを行うもの)と同型であり、ヒッチコック映画のマクガフィンを演芸に適用したものと考えられる。ノンスモーキングの「ジャンケン大王」も同様。これらのS・R構造コントは、科学的発見の過程における「法則探し」と類似していて、マクガフィンに対して説明可能な仮説を立てては捨て、最終的に現在のモデルにたどりついたベンゼン環のケクレ構造の発見と結びつく。

3) アンジャッシュのコントがいずれもキプロクオ構造をもつことは周知のことであったが、2012年以降の作品についても同様で、Qq・Ld型は現在もなお健在であることを確認した。最近10年間のコント作品とりわけ「キングオブコント」出演者の作品のなかには、疑似キプロクオとでもいうべき作品群が見られた。例えばインパルス「コンビニ」のように、コンビニのルーティン語法と駅員のルーティン語法とが交錯して、どちらでも理解可能な状況すなわちキプロクオ状況が成立していて、なおかつ関係者はその取り違えに気づいている(気づいていないことが正規のキプロクオの条件)というテキストが現れた。芸人の仲間うちでは「かぶせ」とも呼ばれる「二元結合」(Binary Combination)によるもので、これが何度も繰り返されるため、Bc・R構造をもつ。

科学的創造性においては、トマス・クーンが科学革命として取り挙げた重要な変革すべてがこれに該当する。太陽中心説も地球中心説も同一の現象(日食や惑星の逆行など)を、全く正反対の視点から捉えていて、なおかつ互いに相手の視点からの捉え方の存在も理解できたからである。フロギストン説から酸素説(近代化学)への移行も、負の重量というアド・ホック仮説の導入により両者が拮抗するキプロクオ構造を実現している。実際に二つの視点からの説明が同時に成立するために設けられる、この手の「アド・ホック仮説」はしばしば、アメリカン・ジョークや日本の小話のユーモアの技法として取り入れられている。

4) 落語作品「たがや」のように、改編によって、オチの部分に矛盾を生じる場合もある。初期形の話はこうである。両国の花火を見る立ち見客で橋が満員すし詰め状態のうちに、供侍をつれ武士が馬に乗って橋を渡ろうとする。これだけで十分人迷惑だが、そこは二本差しの特権、群

衆を押し退けて通ろうとする。そこに反対岸からやってきた「箍屋」。急ぎの仕事で両国橋を渡ろうと人込みをかきわけ進んでゆくうち、背中の道具籠の箍がはねて、あることか武士の笠を飛ばしてしまう。体面を傷つけられた、と武士は無礼討ちにしようとするが、開き直った箍やと武士との一騎討ちとなる。だがそこは武芸の覚えのある武士に分があり、たがやの首は空中に飛び、それをみた物見高い群衆が「た~がや~」と叫ぶという話である。これは花火があがったときの「た~まや~」に似せた言語の遊び、技法5)の類音変換(homonymy)を使ったオチである。ところが江戸後期になると職人階級の富裕化に伴い、寄席の観客構成に変化が生まれ、武家中心だった観客から、町人主体の観客へと変わった。同じ作品にもかかわらず、町人の首が飛ぶ初期形のオチでは新しい観客が満足しないとみた噺家は、結末を逆転させて、武家の首が飛ぶようにした。しかしこれでは、「た~がや~」のオチと矛盾してしまう。強引にアド・ホックな解釈をもちこむならば、修練のない素人同然の箍屋が百錬錬磨の武士の首を討ち取った天晴れに対する、快哉の声だと考えられなくもないが、この事例は、発見の社会的文脈として社会学者プラニガンが導入した、創造的発見に対する新しい因子の存在を示している。

以上、実際に発表した事例研究の一部を示したが、研究期間に収集し分析したテキストは技法イデオムの論理積として整理され、さらにそれらの類型は、創造的発見の推理過程の類型と比較考量された。全体を通して、ユーモアを生み出す知性は、同時に、新たな科学的知識を生み出す探求心と同型であることが判明した、と思う。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計13件)

01「創作漫才」(発表者・井山弘幸、斎藤陽一、2016年03月20、日本笑い学会新潟支部講演会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

02「M1グランプリとキングオブコントの作品解題」(発表者・井山弘幸、2016年01月18日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

03「昭和芸能史を回顧する~コント 55号」

(発表者・井山弘幸、2015年11月17日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

04「古典落語における笑いの位置」(発表者・井山弘幸、2015年10月15日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

05「文七元結の起源と志ん朝」(発表者・井山弘幸、2015年09月10日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

06「落語と活弁における語り」(発表者・井山弘幸、2015年07月21日、日本笑い学会新潟支部笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

07「創作笑芸」(発表者・井山弘幸、斎藤陽一、2015年03月01日、日本笑い学会新潟支部・講演会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

08「キングオブコントの歴代チャンピオン」(発表者・井山弘幸、2014年11月26日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

09「語る落語と一人語り劇場とは何か」(発表者・井山弘幸、2014年10月30日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

10「漫才としての範型から・過去と現在」(発表者・井山弘幸、2014年09月30日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

11「笑芸コントの源流・チャップリンと現代」(発表者・井山弘幸、2013年09月25日、日本笑い学会新潟支部・笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

12「古典落語《死神》をめぐって」(発表者・井山弘幸、2013年07月17日、日本笑い学研究会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

13「笑いと創造性について」(発表者・井山弘幸、2012年07月21日、日本笑い学会新潟支部講演会、新潟市・新潟大学駅南キャンパス・ときめいと)

〔図書〕(計1件)

01『パラドックスの科学論』(井山弘幸著、2013年、新曜社、331頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者。

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授・井山弘幸(Iyama Hiroyuki)

研究者番号：70168532